水資源戦略が日本を救う

グローバルウォータ・ジャパン 代表
国連環境技術顧問／麻布大学客員教授
吉村　和就

吉村　和就 氏

聞き手
矢野　弾
（矢野経済研究所特別顧問
潮流社社長）

――吉村さんは、先ごろNHKの「クローズアップ現代」、そしてBSフジテレビで、大変わかり易く水に対する見解を述べてましたが、アジアの時代ということで、日本がアジアに対して、水のことで提言をするのは、ちょうど今、良いタイミングだと思うんですが、その点はいかがですか。

吉村　人間が生きるために何が必要かと言うと、これはもう誰でもわかる通り「空気と水」ということです。それプラス食料ということですけれども、「水と空気は」、それを絶った瞬間から、もう人間の命が危ない。それから食料のほうは一週間

後から飢餓ということです。

――そうすると、六十七億人という人類に対して、水がどれぐらい供給されているのはどんな具合ですか。

吉村　過去百年の歴史を見ますと、人口増加率の二倍が実は水の需要です。今六十八億五千万人が、例えば二〇五〇年に九十二億人になった場合には、少なくとも約二倍の水が必要となります。現在でも水資源が足りない上に今度は人口増加と経済の発展で、更に足りなくなる。これからハイテクで、全部節水型にして、きちんとコントロールしても、最低一・三倍の水資源量が今後必要になります。

――そうすると〇九年のダボス会議の水資源に対する指摘というのは、大変なことですね。

吉村　ところがそのダボス会議で指摘されたのは、リーマンショック後で、世界の金融どうするかという、掛け声で消されまして、水に関する話題はほとんど出なかったんです。もちろん日本でも、マスコミは取り上げませんでした。私が、国会でこの事実をお話ししたとき、そんなレポートがあったのかというのが、国会議員の皆さんの感じでした。

日本の世界一とは

――でしょうね。そのレポートはあったんですか。

吉村　ええ。これはきちんと英文で出ておりまして、その中では、例えば日本の水環境について書かれてます。外国人が日本に来て、日本全国津々浦々で、どこで水道の水を飲んでも安心、それから衛生的なトイレが日本の津々浦々にあると、つまり日本は世界で一番安全・安心な水環境を持っていることが海外で高く評価されています。

――世界一。

吉村　世界で一番です。

――それは素晴らしいことですね。

やっぱりものの豊かさよりも、自然の豊かさのもっている、特に水の豊かさの意味というのは違いますね。

吉村　そういう意味から言いますと、日本の水は、大体一泊二日と言われているんです。

――一泊二日というのは。

吉村　一泊二日というのは、海が太陽熱で温められて、水蒸気になって雲になって、雲の中に氷の粒ができて、で、それが今度は雨となって陸に降るわけです。山に降って今度は川に流れて、また海に戻るわけですから、海から出て、海に戻るまで、日本の水というのは一泊二日なんです。

――ああ、循環がいいですね。

吉村　簡単に言うと一泊二日の滞留時間で日本の水はうまく循環してるわけです。

――それはありがたいことですね。

吉村　こういう国は世界的に見てほとんどないですね。例えばヨーロッパですと、大体十日で水が循環します。川が長く、例えばアルプスで雨が降ってからライン川を通って海まで行く間に、六カ国を通り、川の長さは千三百キロメートルもありますから途中で汚染されて下流国は使えなくなるわけですね。

――シンガポールは先端的な水資源の確保をしたと聞いていますが。

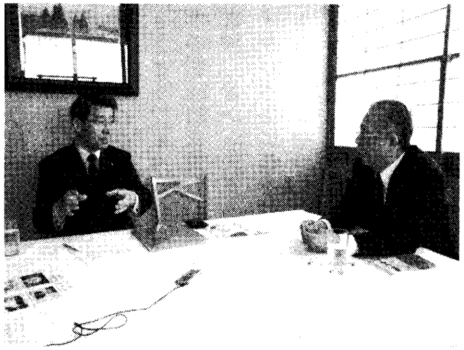
吉村　シンガポールは、淡路島と同じ面積に五百五十万人が住んでいます。淡路島には十六万人しかいないですけど……。シンガポールには土地もないし地下資源も何もない、あるのは、人だけということです。しかもその五百五十万人暮らすために、飲料水は、実は五〇%以上マレーシアから輸入していたんです。

――輸入しているんですね。

吉村　ええ。ジョホールバレイを通じてですね。ですから万一、マレーシアとシンガポールが紛争した場合、マレーシア側でバルブを締められると、明日からシンガポールの国民五百五十万人の半分が干上がっちゃう。それを防ぐために、今までマレーシア側と五十年契約、百年契約で、三本のパイプで契約していたんです。この一部の契約が二〇一二年、切れることになっていまして、その予備交渉を二〇〇〇年にやった時に、マレーシア側は何と言ったか。これから「水道料金・百倍でお願いします」って言ったんです。

――価格をですか。

吉村　価格です。それでもうシンガポールは、これは大変だ、とにかく水は国家の安全保障である次の手を考えろということで、シンガポールにあ



る下水処理場を、全部民間に開放して、それと同時にあらゆる水に関する最先端な技術を世界中から集めたんです。それでは今までのマレーシアから買っていた五〇%の水をどうやって国内で自給するか。ここはアジアモンスーン地域ですので、雨が降るので、まず雨水を貯めましょう。それから海に囲まれていますから今度は海水の淡水化。そして自分たちが使った下水を、日本製の水処理膜で処理をして、それを今度は飲料水にする、これはニューウォーター計画と呼ばれています。

――危機意識で水の自給自足ということで回っていきますと、いかがですか。

吉村　シンガポールの賢いのは、先ほど言ったように、自分の国土には何もない、ですから世界の経済を先読みして、それをビジネスにする、例えばコンテナヤード、これは世界で一番ですね。中国、韓国そして日本で製造した製品は、ほとんどシンガポールのコンテナヤードに集まって、それを世界各国に輸出しているわけです。

――じゃあ世界の中継地ですね。

吉村　世界で最大のコンテナヤードがシンガポールです。それから次にやったのが、アジアの金融センターということで、今シンガポールがアジアの金融センターになっています。三番目がこの水ビジネスです。自分の国土を守るためにやった水処理の技術、これを学んで、今その技術と華僑人脈でもって世界へ出て行って、水ビジネスで外貨を稼いでいるのがシンガポールです。

――この三つは、実を言うと、日本がやらなきゃならんことでしたね。

吉村　ええ。まさにその通りです、日本がもしアジアは一つということで、ご指摘のように、一九〇〇年代に日本が国家戦略をもっていれば、例え

ばアジアの基軸通貨としての円通貨、それからアジアにおけるコンテナヤードの中心拠点、水ビジネスの創出そういうものが全部日本発で出来たわけですね。

――どうでしょうか。今から取り組むことが、日本の新経済成長戦略にならないでしょうか。

吉村　昔から世界の有識者からよく言われたんですが、本当に日本は動かなかった。じゃあなぜ日本は動かなかったかと言うと、やはり一億二千四百八十万人がいて、そこそこのことをやっていると適当なお金が回り、また明日食べるものがあり、なんとなく暮らしていけるわけですね。大きく儲けることはできませんけれども……、明日の糧は得ることができた。また公共事業がありまして国内でもある程度資金が回っていたということですね。ですから、海外に行って頑張る必要がなかったというのが現状じゃないかなと思います。

――それで需給が足りたということで日本自身の克己心や、あるいは挑戦心が遅れたというためにその中断が生まれたんでしょうけど、このことは後追いでもやるべきでしょうか。

吉村　ええ。日本人の特徴とすれば、明らかなコンセプトを与えられると本当に熱心に努力する国民性なんですね。ただ、今までポリシーと明確な論理を、旗印として見せて、しかも、俺についてこいというリーダーシップを持った人がいなかったというのが日本の失われた二十年じゃないかなという気がしますね。

――そうですね。今からでもそれはやらなきゃならない。

吉村　ところが、それが今、民主党政権になりまして、私も前原誠司さんとか、樽床伸二さんなどに呼ばれて日本の水戦略などに関して、政治家としてやるべきことをお話しするんですが、彼らは話は良く聞くんですけれども、「それは俺がやる。次にどうすべきか」という前向きなアイデアと行動力がないんですね。聞いて終わりなんです。

――じゃあ、点・線・面・球は点でおしまいですね。それをやっぱりやることを推進することが日本の未来をつくりますね。

吉村　ええ、そうですね。

――でも、自民党の中にそれ、わかってそうな人

いるんじゃないですか。

吉村　かつては財務・金融大臣を務めた中川昭一さんがいたんですけれども……他界されました。一番残念なことは、つい少し前までは政権与党だった自民党に水に関する後継者って今いないんですね。

アジアの存在感とは

――今からつくらないといけませんね。アジアで日本が存在感を示すためにも。

吉村　そういう意味では日本は例えば、東京の千三百万人がこれだけスムーズに動いてるのはなぜかというと公共インフラ（鉄道、通信、電力、上下水道など）がしっかりしているわけです。ですから、そういうものを本当はインフラパッケージにして、例えば中国の都市づくりに貢献するということが、本来は隣国である日本がどんどん提案をしていかなければいけないということです。

――そうですね。そういうことがやれそうな人って言ったら、安藤忠雄さんぐらいですかね。

吉村　彼は建築家で都市づくりですね。それから今度は地下を見る人ですね。地下を見るというのは何かというと、例えば、上下水道それから、地下鉄とかです。

――そういう提案など日本は、できるんでしょうか。

吉村　それは世界と付き合うためには、やっぱりガバメントとガバメントの信頼関係がなくちゃいけない。それから、特にインフラの場合は、相手国で五十年、百年使うものを他国がやるわけですから、これはやはり信頼関係と、それから国のサポートがないとできないわけです。民間会社が出て行っても、儲からないからすぐやめたというと、これは全部国際問題になるわけですからね。

――そうですね。そうすると、やっぱり政治ですね。政治を司る、あるいは政治を運用する中にそういう見識と実行力のある仕組みと人間をそこで構築しなきゃいけないですね。

吉村　ええ。仕組みの構築、私の好きな言葉で日本のいろんな産業界、それから政治というのは「指揮者のいないオーケストラだ」ということですね。

――指揮者のいないオーケストラとは。

吉村　ええ、指揮者がいないんですね。

――それは日本の指揮者を探してこなきゃいけないですよね。

政治にこそ指揮者を

吉村　これはあらゆる分野にあてはまると思うんですが、日本人は個人個人の能力、これはものすごく優れたものがあるんです。だから、これをやりなさいと言うと本当に頑張るわけですね。戦争が終わっても、まだ山にこもって日本の為に頑張る人もいるぐらいですから……。

例えば、オーケストラで言うと第一バイオリン、第二バイオリン、ティンパニーと、皆さんものすごい技量を持っています。ところが、指揮者がいないためにそれぞれが自己主張するものですから、それが全部不協和音になって交響楽にならない。例えば、バーンスタインとか小澤征爾さんみたいな指揮者がいて、タクトを上げた瞬間に全員が心を集めてスタートできると、こういう指揮者が今後ますます必要と思うんですね。

――どうしたらよいのですか。

吉村　よく言われるのは指揮者を作るときに、省庁間の縦割りが弊害で、省庁を一つにしちゃえと。

――ああ、それもできませんね。これ、何回言ってもだめなんですか。

吉村　だめですね。水に関する言葉で「百年河清を待つ」という諺がありますが、私の場合は全部水だと言わないと、つまり我田引水にしないと水ビジネスが成り立たないもんですから。

――吉村さんはネットワーカーにはいかがなんですか。今の場合は参謀ですから提案型になってますけど、それを聞いて動く仕組みというのをどうやりましょうか。

吉村　そうですね。今まで政党の話をしましたが、実は政権与党に期待できなくなると、それぞれの官僚あるいは衆参の議院調査会が動き出しているんです。これで日本はいいのかと。やはり日本の中には、ファンダメンタルに考えてらっしゃる方がいらっしゃいます。例えば、私は先日、参議院の「国際・地球環境・食糧問題に関する調査会」に参考人招致ということで呼ばれました。

――いつですか、それは。

吉村　二月の二十三日です。この調査会には国会議員の先生、超党派で二十五人のメンバーがいます。とにかく食糧と国際問題と水問題を聞きたいということで、三時間にわたって二十五人の国会議員の先生から私は質問攻めにあいました。

――そうですか。

参議院「国際・地球環境・食糧問題に関する調査会」

吉村　ええ。その質問内容を聞くと、その先生が逆に言うとどのぐらいその分野の勉強をしているか、それからどんな遂行能力があるかということが逆にわかっちゃうんですね。

――ああ、わかりますね。

吉村　参議院から会議録を送ってまいりまして、官報にも公表されるらしいです。日本がこれから世界に出て行くためには単なるレアメタルを含むハイテク輸出だけじゃなくて、ローテクの中のローテクの水問題をしっかりやらなければいけないという動きが出てきています。ですから、こういう動きをきちっと今度は超党派で動くようになってくれればいいなということですね。

――そうですね、それが一番ですね。

吉村　はい。

――ですけど、牽引者がいなきゃいけないことだけは事実ですね。

吉村　ええ。ですから、やっぱり指揮者が欲しいなということです。

水資源は戦略がいる

――水政策議員連盟は立ち上がったのですか。

吉村　これはもう立ち上がっておりまして。ただ残念なことに、これも水政策議員連盟の会長さんがころころ変わるんですね。

――ああ。今、誰ですか。

吉村　前は樽床伸二さん、今度は川端達夫さん、前の文科省の大臣ですね。しかも、また変わろうとしていますので、一貫した話ができない。責任ある議員連盟の運営と、それから超党派での動きを期待したいですね。

――どこかでジャーナルの中でそれをしっかり見つめ、しっかり語り、世論形成のできる道筋っていうのはやっぱり要りますね。

吉村　政治に期待するか、政治が期待できなければやっぱり民からの声ということで、私はいろんなマスコミを通じて水問題の解決の大事さや、日本が水ビジネスで世界に出て行くリスク管理などいろいろ警鐘を鳴らしてるわけですね。そういう意味では、マスコミに登場した水ビジネスという言葉は、去年は四十件しかなかったんですが何と今年は二百六十件以上あります。だんだんマスコミが水ビジネスの可能性に注目すると。今度はそれが国家戦略のツールとして、日本は水ビジネスで外貨が獲得できるんだということが、皆さんが知ってきたんじゃないかなという気がしますね。

――では締めの言葉を。指揮者発見のための方法をどうするかということで何か。

吉村　そうですね。日本人はやっぱり何事もきちっとしたテーマを与えられると、やる人種なのですから、先ほど言った通り、責任ある指揮者が旗印をきちっと挙げることが必要です。それから、私が責任を持ってやりますよという力のある指揮者、これが必要だと思うんですね。そういう人たちが出てくるためには、やはり私は民の声として日本の優れたインフラ技術の輸出が国家戦略になるんだということを言い続けることが重要と思います。日本を救う力強い指揮者の発掘、これは民主党も自民党も公明党も関係ありませんので、超党派でぜひそういう仕組みをつくっていただければなと期待しております。

――今日はどうもありがとうございました。

■よしむら・かずなり■　一九四八年秋田生まれ。一九七三年荏原インフィルコ株式会社入社。一九九四年株式会社荏原製作所本社経営企画部長。一九九八年国連ニューヨーク本部、経済社会局・環境審議官に就任。二〇〇五年グローバルウォータ・ジャパン設立。